

## 出展資料リスト

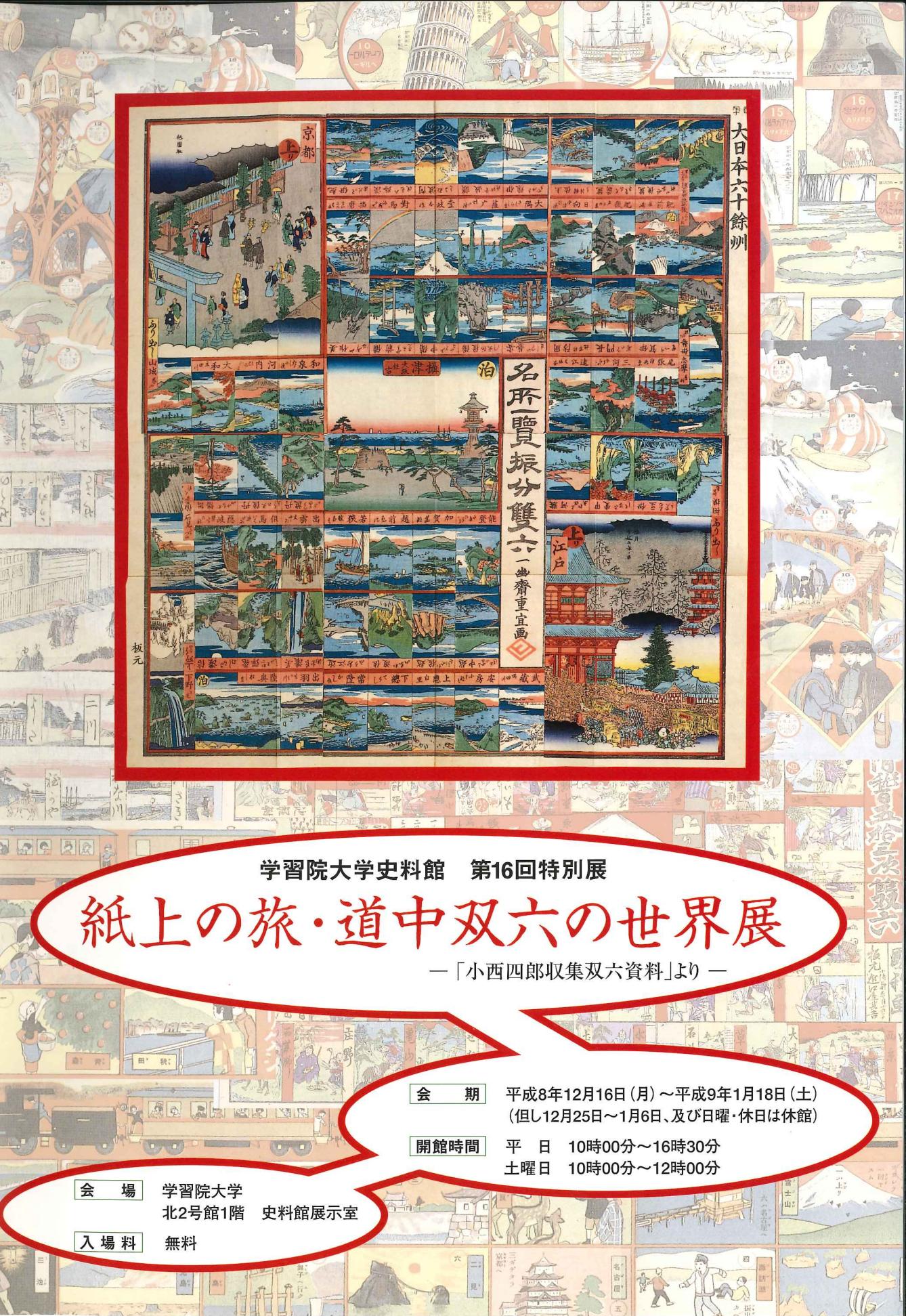
資料名	作者等	発行者等	制作年
於さ奈遊び正月雙六	歌川広重／画	有田屋清右工門／版	天保14年～弘化4年(1843～1847)
新板道中双六	歌川芳員／画	和泉屋市兵衛／版	幕末期
新板道中双六		山口屋藤兵衛／版	江戸時代後期
大日本六十餘州名所一覽振分雙六	一幽斎重宣／画		安政3年(1856)
けおと東海道五十三次雙六	歌川国貞(3代)／画	横山良八／版	明治初期
東海道滑稽五拾三次雙六	歌川国利／画	近江屋其吉／版	明治初期
日本周遊雙六	水野年方／画	博文館／発行	明治29年(1896)
世界第一双六	岡本帰一／画 安倍季雄／案	時事新報社／発行 『少年』大正10年209号付録	大正9年(1920)
世界周遊双六		大葉久吉／発行 『櫻の実』2巻1号付録	大正11年(1922)
滑稽世界漫遊双六	山田みのる／画	大日本雄弁会講談社／発行 『少年俱楽部』4巻1号付録	大正6年(1917)
世界一週競争双六	太田三郎／画 キング編集局／案	大日本雄弁会講談社／発行 『キング』2巻1号付録	大正15年(1926)
汽車旅行雙六		キンノツノ社／発行 『ナカヨシ』1巻1号付録	大正8年(1919)
乗物應用 初日の出參拜競争双六	河島穂波／画 岩下小葉／案	増田義一／発行 『幼年の友』10巻1号付録	大正7年(1918)
新子供汽車旅行スゴロク		コドモ画報社／発行 『新子供』3巻1号付録	大正7年(1918)
電車双六	布目敏行／画	博文館／発行 『幼年画報』21巻1号付録	大正15年(1926)
東海道乗物双六		活動俱楽部社／発行 『幼き花』新年号付録	大正11年(1922)
冒險雙六	木村圭三／案・画	石川誠三／発行 『幼き友』4巻1号付録	大正13年(1924)
火星國探検競争双六	樺山勝一／画 少年俱楽部編集局／案	大日本雄弁会講談社／発行 『少年俱楽部』14巻1号付録	昭和2年(1927)
友子の空想旅行双六	川端龍子／画 星野水裏／案	実業之日本社／発行 『少女の友』12巻1号付録	大正8年(1919)
少年未来旅行双六	川端龍子／画 有本芳水／案	実業之日本社／発行 『日本少年』13巻1号付録	大正7年(1918)
(参考出展) 還魂紙料	柳亭種彦／作 葛飾北斎／画	西村屋与八／版	文政9年(1826) (学習院大学文学部日本語日本文学科所蔵)

本展の開催にあたり、次の方々に御協力いただきました。  
深く感謝の意を表します。

小西 晃  
学習院大学文学部日本語日本文学科  
たばこと塩の博物館

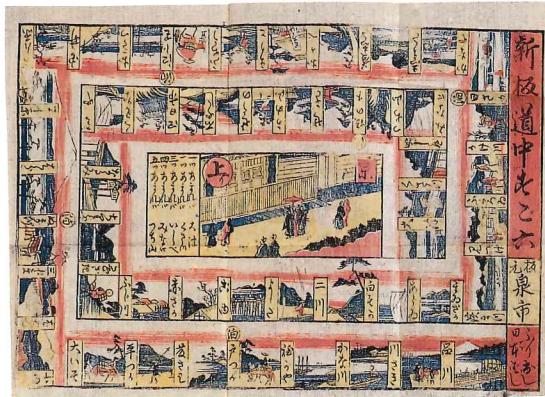
執筆・岩城紀子  
(敬称略)  
(学習院大学史料館特別研究員・江戸東京博物館学芸員)

第16回特別展	紙上の旅・道中双六の世界展 —「小西四郎収集双六資料」より—
会 期	1996年12月16日(月)～1997年1月18日(土)
編集・発行	学習院大学史料館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 TEL.03-3986-0221
発行年月日	1996年12月
印 刷	株式会社シータス



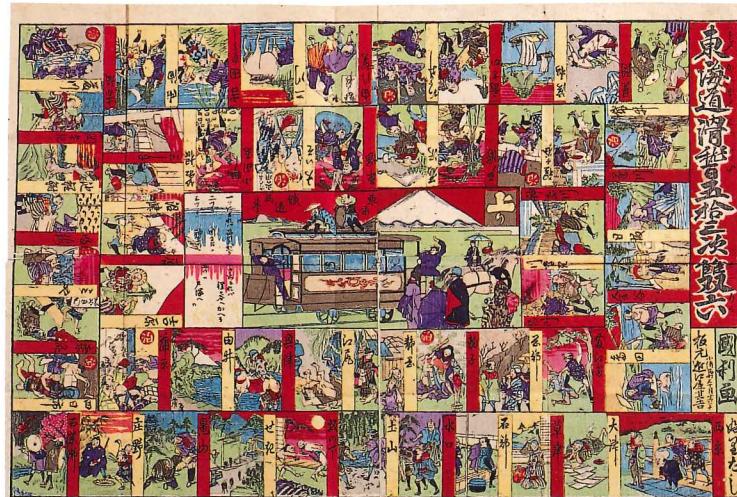
絵双六は、江戸時代中期ごろ庶民の室内遊戯として普及し始めました。その後正月の代表的な遊びとして、明治・大正・昭和を通して流行を見ました。「道中双六」は、庶民の旅への憧れを紙上に再現した絵双六であり、特に江戸・日本橋を振出しに、京都を目指す東海道の旅を描いたものは、数ある絵双六の中でも最もポピュラーなものでした。

本展では、幕末から明治・大正へと、人々が夢見た憧れの地への旅が時代とともにどのように移り変わったのか、当館に寄託されている故・小西四郎氏の約1000点に及ぶ絵双六コレクションよりご紹介いたします。



## I 正月の遊戯・道中双六

現在「双六」といえば、多くの人が正月の遊戯というイメージを抱いていると思います。絵双六がいつごろ正月の遊びとして定着したのか、明らかではありませんが、文化・文政期にはすでに子供の正月の室内遊戯として全国的に広く普及していたことが、文献上からも確認できます。特に東海道五十三次の旅を描いた道中双六は、定番として人気があり、絵草紙屋の店先を飾るとともに、市中には掛け声とともに振り歩く道中双六売りの姿も見られました。



## II 帝都を目指す旅

明治元年（1868）に行なわれた天皇の東幸の後、東京は遷都の宣言のないまま日本の首都として機能し始めます。この都の移動に呼応するかのように、道中双六の行路も逆転します。振出しがあった江戸は、新都・東京として上がりへと変わり、それを象徴する場として、上がりには二重橋が多く登場するようになります。



## III 日本から世界へ

日清・日露の二つの戦争の勝利は、国民の間に「世界の日本」への飛躍を印象づけました。道中双六もこうした時代の空気を受け、日本という枠を越えて、世界へとその舞台を移していきます。横浜から船に乗り、世界周遊の旅を終えた後、「世界の日本」の帝都・東京二重橋に再び双六のコマは帰ってくるのです。



## IV ノリモノに乗って

明治5年（1872）に開業した鉄道は、その後目覚ましく発展し、明治39年（1906）には開業線総延長5000マイルに達しました。こうした交通網の発達にともない、国内の旅はより身近なものとなりました。双六で遊ぶ少年少女たちにとっては、旅そのものよりも、鉄道をはじめとするさまざまな乗物に乗ることが憧れとなりました。



## V 冒險・探検、そして未来への旅

未知の世界への憧れの旅を描く道中双六は、さらに空想の世界をも取り入れていきます。前人未到のジャングルや無人島など、地球上の冒險旅行にとどまらず、地球を飛び出し宇宙へ、そして未来社会へと、夢の旅は限りない広がりを見せていきます。